

2. 内面的なしなやかさをもった「国際」を目指して

東北学院大学国際学部へようこそ。

国際学部を立ち上げるにあたり、「国際」って何だろうと教員間で話すことが多々ありました。海外に出て外国語を駆使し相手と難しい交渉をする。そんなイメージも「国際」の一つですが、実は「国際」とは内面的なものではないかと私たちは考えています。

少し個人的な話をします。私の最初の外国滞在は2年間のアメリカ留学でした。この時わかったことは、自国を出ると嫌でも自国を意識させられる、ということです。英語と英語教育を学んでいた私は、日本についての専門知識はなく、日本代表で派遣されたわけでもないの、「どこから来たのか」に始まって日本のことを聞かれるのが面倒だと感じていました。しかし日本で起きた出来事がアメリカで報道された時に、背景が十分に伝えられていないと気づいてからは、考えが変わりました。英語を学ぶだけではダメなのだと。生まれ育っただけでその国のすべてを知っているわけではない。でも外から見えにくいことを中にいる個人が伝えることに意味はある。それが「〇〇国は…だ」「〇〇人は皆…だ」という単純な見方を変えるきっかけになるのだ。そう考えるようになってからは、質問されることで自分の知識や思考が深まるのが楽しくなりました。



国際学部長

渡部 友子

外国に行って外国語を使って活動することが「国際」だという考えは、間違っていないが狭いと思います。慣れ親しんだ場所の外に目を向け、多様な人々と関わりながら成長していくことが広い意味での「国際」化だと考えると、大学入学自体がその足掛かりになります。大学は新しい出会いをもたらし、幅広い学問の世界への扉を開く場所からです。さらに国際学部には、外国出身の教員や外国との関わりが深い教員が多くいます。彼らと共に学ぶ中で、自分とは異なる考え方に接する機会は多くあるでしょう。つまり外国に行かなくても「国際」の第一歩を踏み出せるのです。

国際学部の柱の一つは、外国語の学びです。それは、日本語を話せない人とつながろうとする時に外国語は有用だからです。入学1年目は、英語・中国語・韓国朝鮮語のどれかを選んで集中的に学ぶことが中心になります。加えて、日本語教育についても学ぶことができます。実は日本語も「国際」につながります。なぜなら日本国内に限っては、出身国が異なる人々が意思疎通するときに共通語として日本語が用いられることも多いからです。日本には外国からの来訪者や居住者が多くいます。彼らに伝わりやすい日本語とはどのようなものかを考えることは、皆さんの「国際」的な関係性の広がりをもたらすでしょう。

では留学はしなくていいのか。この問いへの答えは、した方がよい、です。なぜなら留学は、外国語力の向上だけでなく内面的な変化の起爆剤になるからです。しかし重要なのは留学終了後です。帰国後も外国語を学び続け、多様な人々と関わる機会を作らなければ、留学で得られた「国際」はやがて失われてしまうでしょう。留学すれば「国際」的な人になれる、留学できないからなれない、と思わないでください。「国際」は皆さんの内面に育つものです。見る方向を少し変えれば、今いる場所にも糸口はあるかも知れません。日本から一歩も出なくても、外国で起こる様々な問題の影響を私たちは受けています。そのことに気づくのも「国際」です。

新設学部の入学生である皆さんは、未知の世界に飛び込む勇気をもっています。私たち教員と共に、新しい道を切り開きましょう。皆さんが見たいと期待している景色、あるいは想像を超える景色を見ることができるよう、国際学部は応援します。